

長期ビジョン（仮称）本文

序 文

第一章 長期ビジョン（仮称）策定の背景

第一節 世界文化自由都市宣言—世界史を担うまち

第二節 京都市基本構想—21世紀の到来を見据えて

第三節 長期ビジョン（仮称）の策定—「都市の理想」に立ち返って

第二章 京都市のかたち

第一節 悠久の自然との共存の中で

第二節 歴史の重なり、文化の奥ゆき、ひとの連なり

第三節 矜持と節度のもとでひらかれたまち柄

第三章 世界及び日本の動きと京都市のいま

第一節 世界及び日本の動き

第二節 京都市のいま

第四章 わたしたち京都市民がめざすまち

第一節 自然への畏敬と感謝を抱けるまち

- (1) 謙虚さのもとで自然と関わり続ける
- (2) 災害や感染症などの危機からしなやかに立ち直る

第二節 歴史と文化を介して人間性を回復できるまち

- (1) 世界の文化と交流し、新たな文化を創造し続ける
- (2) 本物（ほんまもん）を追究・創造し続ける
- (3) 支え合いの中で日々の生活を営める

第三節 自他の生をともに肯定し尊重し合えるまち

- (1) 多層的でゆるやかなつながりが続く
- (2) 「夢中」と「感動」に溢れ、学び続けられる
- (3) ひとりひとりの個性や価値観を尊重し合える

第五章 わたしたち京都市民のこれから

結び

序文

わたしたち京都市民は、京都市が、
わたしたちと世界中のあらゆる人々にとって、
歴史と文化を介して人間性を恢復できるまち、
自然への畏敬と感謝を抱けるまち、そして、
自他の生をともに肯定し尊重し合えるまちであり続けるために、
不断の努力を重ねていく。

人間は、過去に生かされ、未来を生きている。

京都市は、その成立から 1200 年以上の歳月を経て、人類の文明においても稀有な歴史都市・文化都市として世界中の人々から敬愛されるに至った。しかしながら、今日に至るまでには、有名・無名を問わない無数の先人たちの献身があったことを忘れてはならない。このまちを重層的に彩る各時代の史跡も、人間の極致を体現してきた工芸や芸道も、歴史の偉大な産物であるのみならず、市井の人々の愛着と創意とに支えられて残存してきた。

わたしたち京都市民は、幸運にも近年の戦禍を免れてきたこれらの人間的遺産の享受者であると同時に、これらの継承者でもある。この系譜に在ることの意義と幸福を噛み締めながら、節度と矜持のもと、先人たちの営為の結晶を未来に伝え遺していく責任を果たしていきたい。

人間は、自然に生かされ、自然を生きている。

京都市は、信仰から美意識に至るまでのさまざまな思想を、豊かな自然との関係の中で醸成してきた。悠久を体現する山々に囲まれ、清らかな水の恵みに満ち溢れたこのまちは、自然と人間の原義的な不可分性や一体性を思想的土壌とし、食文化や農業はもちろん、服飾、建造物、そして町並みまでもがこの水脈と土壌とに根差している。

わたしたち京都市民は、自然を人間から切り離し客体化してきた過去数世紀を省み、新たな可能性として、このまちが育んできた自然観一ゆえに、これと不可分な人間観一を世界に提示していくとともに、他の文化圏・思想圏との響創のもと、人間と、人間の営為たる科学や経済、そして自然が、真に共存する未来に貢献していきたい。

人間は、共同体に生かされ、共同体を生きている。

京都市は、短期的・個別的な利益追求が偏重される時勢においてなお、長期的な共栄を希求しながら、今日においては非合理・非効率と評され得るさまざまな人間的つながりを保全してきた。このまちには、地縁や職業のみならず、学事、祭事、稽古事、ひいては名も無

きかかわりにつながり彩り豊かな共同体が今も数多く息づいている。複雑で、繊細で、それゆえに愛おしくてたまらない生身の人間関係こそが、数多のつらなりとかさなりを宿すこのまちを織り成してきた。

わたしたち京都市民は、来る四半世紀の間に、国内外の人口動態の変化、言語の壁の融解、さらには、これらに伴う経済構造や社会規範の変容の中で、地域社会のみならず国際社会の一員として、数多のつながりを紡いでいくこととなる。世界中の人々と生み出すこのまちの新たなひろがりにおいて、わたしたちの日常を包んできたあたたかな息遣いのもと、互いの歴史、文化、自然、そして人の在り方をともに尊重していきながら、京都市と人類社会の双方の恒久の平和と共栄を実現していきたい。

第一章 長期ビジョン（仮称）策定の背景

第一節 世界文化自由都市宣言—世界史を担うまち

「都市は、理想を必要とする」。京都市の最上位の都市理念として1978年に策定された世界文化自由都市宣言は、端的ながらも都市の真髓を宿したこの一文に始まる。続いて当該宣言は、世界の現状の正しい認識、自己の伝統の深い省察、そして市民の努力によって都市が世界史において大きな役割を果たすと展望した上で、永久に新しい文化都市として、平和のもとでの自由な世界文化交流の中心を担っていくという京都市の理想を示している。

世界文化自由都市宣言は、この理想の実現に向けた「われわれ市民」の決意を宣したものであり、約半世紀を経てなお、わたしたち京都市民に拠り所を与えてくれている。

第二節 京都市基本構想—21世紀の到来を見据えて

世界文化自由都市宣言で掲げられた理念のもとで、1983年に市政初となる京都市基本構想が策定された。その後、1999年には市民の熟議を経て、新たな基本構想が策定される。

21世紀最初の四半世紀を見据えた当該構想は、「わたしたち京都市民」を主語とし、京都市民の根底にある価値観を6つの得意技（めきき、たくみ、こころみ、きわめ、もてなし、しまつ）として再確認するとともに、信頼を基礎に市民社会の再構築をめざすというまちづくりの方針を示した。また、誇りと責任感に基づく市民ひとりひとりの市政への積極的な参加を呼びかけたことで、策定の過程での熟議とも相まって、新時代に即した市民主体のまちづくりの土壌となった。

第三節 長期ビジョン（仮称）の策定—「都市の理想」に立ち返って

2011年の地方自治法の改正によって基本構想の策定義務が廃止されたにもかかわらず、この後継に相当する本長期ビジョン（仮称）の策定に至った背景には、2025年の現在においてこそ、世界文化自由都市宣言で述べられている「都市の理想」の重要性が一層増しているという時代認識と課題意識がある。

1999年の京都市基本構想の策定から四半世紀の間、人類は、グローバル化の進展、インターネットやAI（人工知能）技術の普及、自然災害や感染症、戦争・紛争、さまざまな社会的分断の顕在化、そして、これらに連関する数多の変化を経験してきた。本長期ビジョン（仮称）は、時代の変化が複雑化・加速化の一途を辿る今日において、世界文化自由都市宣言という都市の理想にいま一度立ち返り、京都市とわたしたち京都市民の今後四半世紀の在り方を展望するものであるとともに、これを継承してきた京都市基本構想の系譜を京都市の未来へと継承するものである。

第二章 京都市のかたち

第一節 悠久の自然との共存の中で

このまちの歴史は794年の平安京の成立以前にまで遡るが、自治体としての京都市は1889年の市町村制度施行によって誕生した。以降、幾度もの行政区の分合を重ねながら、2005年に1200年前の平安京造営の木材供給も担った旧・京北町との合併を経て、現在の市域となった。

このまちを生きた先人たちは、悠久を体現する京都三山（東山・北山・西山）を望みながら、鴨川・桂川・琵琶湖疏水をはじめとする豊かな水の恵みのもと、人間と自然を原義的に不可分な存在と捉える自然観を思想的土壌として育んできた。玄関や床の間に融け込む草花、日々の食卓に並ぶ和食や和菓子、まちの景観の一端をも担う花かんざしといったさまざまな生活様式や文化様式が、この自然観を宿しながら今日の京都市にまで根付いており、わたしたち京都市民と京都市にかかわる人々の生に彩りを与えてくれている。

過去数世紀の間、人類社会は、人間と自然を近代的・二元論的に切り分けて捉えた上で、自然を支配の対象としてきた。この態度への反作用と反省もあって、20世紀後半には「共生」、21世紀前半には「持続可能な開発」といったことが提唱されるに至った。しかしながら、この地を生きた先人たちは、これらの言葉が社会的に流行する遙か以前から、人間と自然の不可分性の中で共存を志向し、これを生活と文化において体現してきたのである。この自然観は、改めて世界に提示していくに値するだろう。

第二節 歴史の重なり、文化の奥ゆき、ひとの連なり

このまちは日本史の主要な一角を担ってきたが、その軌跡は決して単一的・直線的なものではなかった。朝廷・幕府といった政治体制、神道・仏教・儒教をはじめとする宗教思想、これらと連関した経済活動などが複雑に絡み合う中で、戦乱等の危機を経てなお文化の力で再建を重ねながら、多層的かつ多元的に織り成されてきた長い歴史の現在地が、わたしたちの京都市である。

このような歴史の重なりの中で成立してきた芸道や武道、工芸といった文化様式の根底には、人間が到達し得る極致への志向を見出すことができる。身体と心、自己と他者、人間と自然を本来的に不可分と捉えるその精神性は、茶道や華道、能や武道、果てはこれらの道具や建築などを經由し、さまざまな生活様式においても体現されてきた。また、これらの文化は、今日まで名が伝わる名人や職人のみならず、名も無き担い手の創意や市井の人々の愛着と主体的な努力に依って受け継がれてきたことを忘れてはならない。

こうして育まれてきた歴史と文化の重なりと奥ゆきは、長きにわたり、新たな人間関係の端緒や基盤となり、また、この人間関係こそが新たな歴史と文化を創発してきた。京都市の歴史と文化の重なりと奥ゆきは、今日においては軽視されつつある生身のひとの連なりを織り成すとともに、わたしたち京都市民の日常を、過去や未来と不可分なものとして繋いでいる。現在を生きるわたしたち京都市民は、先人たちが紡いできたこのまちの歴史と文化の中を生きているのであり、また、これらを未来へと引き継いでいく責任の中を、同時代の人々とともに生きているのである。

第三節 矜持と節度のもとでひらかれたまち柄

このまちの歴史と文化は、それぞれの時代と分野とを生きる人々の矜持と節度によって支えられてきた。時流に翻弄されることなく、生涯を捧げて伝統の真髄の普及や保全に尽力してきた先人たちの矜持は、その作品のみならず景観にまで刻まれる、このまちの空気をつくってきた。また、この空気こそが、分野を超えた敬意と、自分の領分を安直に超えない節度とを、人々の内に育んできた。この矜持と節度に由来する絶妙な間合いとあわいは、今なお、表面的な言葉や短期的な経済合理性を超えた人間的信頼の基盤をこのまちに与えてくれている。

このまちは、伝統を保全するのみならず、先駆や進取によってさまざまな文化や産業を創出してきたまちでもある。数々の芸道や工芸の発祥の地となったのみならず、現代においても精密機器や先端技術産業の国内主要拠点の一つを担っている。これらの基盤には、矜持と節度のもとでの闊達さに基づく、ひらかれたまち柄がある。時勢に安直に迎合することなく、それでいて分野や市域を超えて人々が交わりながら新たな創発を追求していく態度は、まさに守破離の体現と言えよう。

わたしたち京都市民の日々のくらしもまた、この矜持と節度、そしてひらかれたまち柄の中で営まれている。商店街には個性豊かな

専門店が立ち並び、横目に過ぎ去る、立ち止まって眺め入る、ひいては踏み入るといった自在な関わり方を見出せる。鴨川の河川敷では、銘々が、歩き、走り、座り、書を読み、水面を眺め、木々に触れ、地域猫を愛でるなど、人それぞれに過ごしている。こういった多彩な人々が互いに適度な距離を取りながら、微笑みを向け合い、ふとした拍子に言葉を交わし、果ては共通の友人を見つける。わたしたち京都市民は、このようなひらかれたまち柄の中で、自然の悠久、歴史の重なり、文化の奥ゆき、そしてひとの連なりを享受し継承している。表面的で即時的なつながりを促す時勢とは必ずしも軌を一にはしない矜持と節度、そしてひらかれたまち柄こそが、京都市を京都市たらしめているのである。

第三章 世界及び日本の動きと京都市のいま

第一節 世界及び日本の動き

21世紀最初の四半世紀において、世界人口はアジアとアフリカを中心に増加の一途を辿ってきた。しかしながら、国内人口は2008年をピークに減少局面に入り、2024年現在は約1.2億人、2050年代には1億人を下回る見込みである。すでに、内需の縮小、労働力の不足、社会保障費の増大などの影響が顕在化しつつあるとともに、海外からの人材流入も加速しており、外国籍の居住者も増加し続けている。

この四半世紀は、地球温暖化や大気汚染・海洋汚染をはじめとする国境を超えた環境問題が顕在化した時代でもあった。地球規模での対応に向けて国家の枠を超えた協力が志向されてきたが、政治・経済・宗教等の差異に由来する限界など、真の国際協調に向けた課題が顕在化している。日本においては、これらの環境問題に加えて、地震や台風などの自然災害が幾度と発生し、また、南海トラフ地震の発生確率も年々高まっている中で、高齢化・核家族化による地域社会の弱体化とも相まって、防災・減災対策の重要性が高まり続けている。

日常生活においては、デジタル化が急速に進展した。世界的なスマートフォンの普及によってコミュニケーションや情報収集が容易となり、生活利便性が向上した一方で、アテンション・エコノミーと呼ばれる人々の注意力を収奪して利益に転換する経済潮流が増長を見ており、精神疾患の増加、フェイクニュースの氾濫、プライバシー侵害といった問題も深刻化している。

日本経済は、20世紀末からの不況が尾を引く中、2007年の世界金融危機、2011年の東日本大震災、2020年からの新型コロナウイルス感染症の世界的流行、人口減少・少子高齢化や産業構造転換の遅滞などから、2025年現在においてはGDPで世界4位となった。デジタル化によって雇用の流動性が高まり、転職・副業の一般化や女性の社会進出が進展した一方で、所得格差の拡大や労働力不足が深刻化している。

2020年からの新型コロナウイルス感染症の世界的な流行は、身体的・物理的な活動が不可欠な多くの文化様式を存続の危機に追いやるとともに、日本を含む世界各国が経済的に甚大な打撃を被り、多くの事業者が閉業に追いやられた。この間、国際機関や国際的枠組みの限界、国家間の経済力・技術力・行政対応能力の格差、企業間の競争が随所で顕在化する結果となった。人類と感染症の闘いは有史以来続いているところ、世界そして日本全体においても平時からの対応体制構築が不可欠である。

環境問題や感染症の脅威に加え、紛争や戦争の悲惨が21世紀を迎えてもなお発生・持続しており、特に2020年代に入って国際社会の緊張感が一層増長している現状から目を背けてはならない。日本は、直接的には戦禍を免れているものの、経済安全保障の問題をはじめとしてあらゆる国家・地域が世界と不可分となった今日において、いまこそ国際社会の一員として平和の重要性を改めて訴えていく余地がある。

ESG（環境・社会・企業統治）を重視する投資、SDGs（持続可能な開発目標）、DEI（多様性・公正性・包括性）といった、世界全体で理想を共有し、企業等の具体的な実践にまで結実させようとする包括的な取組も進められてきたが、2025年現在においてはこれらへの反発が顕在化しつつもある。しかしながら、日本は、世界各国からの信頼をもとに、これらの理想を掲げることの意義を世界に説いていく役割を担える可能性を有している。

第二節 京都市のいま

京都市の人口は、2000年以来、147万人前後で推移してきたものの、2016年から減少局面に突入した。とりわけ、就職や結婚・育児に伴う若年層の流出が顕著であり、産業の担い手の高齢化と後継者不足が深刻化しているとともに、地域における人間関係の弱体化に拍車をかけている。このまちな長い歴史の中で育んできた住民自治の伝統や支え合いの精神と実践の双方が年々希薄化していることに加え、各地域の歴史に根差した行事やこれらを彩る有形・無形の文化様式が消失の危機に瀕している。さらに、全国的な少子化に伴う京都市内の学生数の減少も予見され、日本有数の大学街である京都市の在り方も大きな変容を迫られていくだろう。

産業に目を向けると、製造業を中心とする大企業が世界市場においても重要な位置を堅持する一方で、これらを支える中小企業を担う労働者・後継者の不足が問題となっており、また、特に観光業や飲食業では市外からの参入も年々増加しており、地域密着型の事業

者等が苦境に立たされてもいる。ベンチャー企業や新規事業の創出・拡大に向けた支援がさまざまに展開されてはいるものの、大学等での最先端の研究成果の事業化や文化と市場の適切な接続を担う経営人材が著しく不足している。グローバル化とデジタル化の流れの中で、地域の歴史と文化に根差した産業を維持発展させながら、未来を担う人材を確保し育成していく必要性が増している。

京都市を訪れる観光客は、過去四半世紀で2割以上増加し、2013年には5000万人を突破、COVID-19の流行によって減少を見たが、2023年に同水準に戻り、現在も増加を続けている。特に海外からの観光客が大幅に増加しており、宿泊業をはじめとする幅広い産業に好影響を与えている。一方で、特定の観光地への訪問客の集中、公共交通機関の混雑、幹線道路の渋滞、マナーの差に由来するトラブルなど、市民の日常生活への悪影響も生じている。京都市の歴史や文化が表面的に消費されていることへの反発も根強いが、海外観光客は今後も増加が見込まれるところ、これらの深みや真髄を異なる文化圏の人々に伝えていく新たな工夫と努力が求められている。

気候変動は京都市においても具体的な影響として顕在化している。記録的な豪雨や猛暑日が増加しているのみならず、たとえば、祇園祭の厄除け粽や京料理の敷き笹に使われるチマキザサ、葵祭の装飾品の材料となるフタバアオイ、五山の送り火や清涼寺のお松明式に用いられるアカマツをはじめとする在来種が消失の危機に瀕している。

わたしたちの京都市においては、地域の人間関係、歴史と文化、産業、そして自然が、すべてつながっており、不可分なものである。わたしたち京都市民は、京都市の未来のために、現状と真摯に向き合い、国際社会の動向や技術革新も踏まえながら、これらの保全と継承という責任を果たすための工夫と努力を重ねていかなければならない。

第四章 わたしたち京都市民がめざすまち

京都市は、先人たちの尽力あって、歴史の重なり、文化の奥ゆき、ひとの連なりを宿す学藝に満ち溢れたまちとして世界に知られるに至った。学問や藝術、そしてこれらに限定されない様々な人間的営為において、真理の探究や伝統の継承・創造に挑む人々の生き様は、その土壌となった豊かな自然と併せて、京都市内のみならず世界中の人々から深く敬愛されている。わたしたちの京都市は、これらの人々の夢中や献身と世界中の人々の敬意と愛着とが出会い、新たな人間関係をも育みながら人類社会の新たな地平を拓いてきた、世界有数の学藝の府である。

わたしたち京都市民は、このまちのいたるところに根付く学藝のもとで市域ひいては時代をも超えてつながる数多くの人々、いわば京都学藝衆とともに、世界文化自由都市という理想の体現を通して、人類社会の未来に貢献していく。この際、近代以降の合理主義の加速化が、自然を支配の対象と捉え、環境を破壊し、人間性を収奪し、さまざまな社会的分断を生み出してきたことをともに省み、自然への畏敬と感謝を抱けるまち、歴史と文化を介して人間性を回復できるまち、自他の生をともに肯定し尊重し合えるまちを、世界へと提示していく。

第一節 自然への畏敬と感謝を抱けるまち

(1) 謙虚さのもとで自然と関わり続ける

わたしたち京都市民は、季節の移ろいを目にすることで自然の美しさを、旬の食材を味わうことで自然の恵みを、地域の伝統や習わしに参加することで自然とのつながりを、折々に享受できる感性を、日々の暮らしとなりわいの中で互いに共有しながら、未来へと継承していく。生活の中に宿る自然との根源的な結びつきをしずかに深め、自然こそがわたしたちの生の源泉であることを再認識し、自然の中で生かされている命のひとつであるという謙虚さのもと、共存し続けていく。

このような自然観を希薄にしていく時流においては、自然との不可分性を改めて実感できる機会を日々の暮らしの中で創り出しながら、後世の京都市民のみならず、世界に向けてもこの自然観を伝え遺していく。

(2) 災害や感染症などの危機からしなやかに立ち直る

わたしたち京都市民は、このまちが1000年以上の歴史の中で培ってきたしなやかさを保持しながら、さまざまな危機に先んじて備え、対応し、立ち直ることができるまちをつくっていく。

このまちは、幾度もの戦乱を経験し、そしてその都度、復興を遂げてきた。このまちが1000年以上にわたり都市機能を遮断することなく存続し続けてこられたのは、先人たちの不屈の精神と知恵や工夫、そして、これらを体現し支えてきた文化の力に依る。また、過去四半世紀の間、わたしたち京都市民もまた、自然災害や感染症の脅威を経験し、立ち直ってきた。その土台には、このまちが歴史の中で育んできた重層的なひとのつながりがある。地域住民、地域団体、事業者、NPOといったさまざまな主体が、それぞれに備え、また、連携・協働し、防災・減災・復興に取り組んでいくとともに、このまちへの愛着と敬意とを、わたしたち京都市民はもとより国内外の人々までもが抱き続けられるよう、自然、歴史と文化、ひとの連なりを守り続けていく。

第二節 歴史と文化を介して人間性を回復できるまち

(1) 世界の文化と交流し、新たな文化を創造し続ける

わたしたち京都市民は、ひらかれたまち柄のもとで世界と文化交流を重ねながら、国際社会ひいては人類史をも豊かにする新たな文化を創造し続けていく。また、このまちの歴史と文化がこのまちの外部との交流によって織り成されてきたことを忘れることなく、グローバル化・デジタル化が進展していくこれからの時代においてこそ、世界中の国や地域から突き抜けた人材を集めるために工夫と努力を重ねていく。また、これらの人材がこのまちと交ざり合う中で生まれる新たな文化を積極的に受容しながら、京都市の多様性と包摂性をさらに高めていき、日本中・世界中の人々から活動の拠点として選ばれるまちにしていく。

(2) 本物（ほんまもん）を追究・創造し続ける

わたしたち京都市民は、先人たちから受け継いできた先義後利・不易流行・利他の心といった思想のもと、短期的な利益にのみ囚われることなく、年月を賭して自らの技術と品質を熟達させながら、内外の人々とも積極的に連携・協働し、また、最先端技術を活用していくことで、世界に類を見ない独自の価値を創造し続けていく。この際、時勢に翻弄されることなく、このまちが醸成してきた矜持と節度のもと、本物（ほんまもん）を見極める感性を研ぎ澄まし続け、これを追究・創造し続けながら、後世と世界とに伝え遺していく。また、人間同士の信頼関係のもとで切磋琢磨し合うとともに、近隣都市とも協働しながら、本物（ほんまもん）のさまざまなかたちを学び、受け容れ、創り出し、まち全体の活力の源泉としていく。加えて、このまちで学藝を直接的に担う師や匠といった人々を紹介したつらなり、各地域の歴史や伝統に基づくかさなり、そして、これらの本物（ほんまもん）への愛着を通してその保全・継承の一端をともに担う市内外ひいては国外の人々ともを結び合わせながら、教育や文化交流はもちろん、日々のなりわいの土壌としていく。

(3) 支え合いの中で日々の生活を営める

わたしたち京都市民は、支え合いを守りそして広げ続けていくことで、誰ひとり社会から取り残されることなく、安心のもとで健康で文化的な生活を営み続けられるまちであり続ける。

このまちは、普段から支援を担う人たちと、普段から支援を受ける人たちが、場面や事情に応じて役割を循環させながら、互いに支え合って歴史と文化を紡いできた。ケアや配慮を提供することで自身も癒やされ、また、これらを楽しむ側となった際にも心からの感謝を胸に抱くことができる。地域の人々がともに子どもたちの登下校を見守り、子どもたちの声と笑顔が地域に活力を与える。こうした相互関係の中で、笑顔や感謝がまち全体にまで広がっていき、このまちの気質を育んできたのである。わたしたち京都市民は、このような人や社会とのつながりをそれぞれに担いながら、多層的な支え合いの中で、ともに自分らしくあり続けられるまちをつくっていく。

第三節 自他の生をともに肯定し尊重し合えるまち

(1) 多層的でゆるやかなつながりが続く

わたしたち京都市民は、番組小学校や町内会といった形で先人によって培われてきた住民自治の伝統を継承しつつ、京都市にかかわるあらゆる人々と、趣味、習い事、商い、祭事などを介して、ゆるやかでひらかれたつながりを紡いでいく。この際、「洛中・洛外」、「心の御土居」をはじめとするさまざまな垣根を、矜持と節度のもとで、少しずつ取り払っていく。また、市外から通勤・通学する人々から観光客に至るまで、京都市とさまざまな関わり方をしている人たちもまた、わたしたちの京都市の現在を担ってくれていることに感謝と敬意を抱きながら、多彩なつながりを多層的に織り成していく。それぞれが望むかたちでかかわることができるまちをつくり、誰もが安心と愛着とを抱ける心地よいまちにしていく。

(2) 「夢中」と「感動」に溢れ、学び続けられる

わたしたち京都市民は、日々の生活の中に歴史と文化が息づき、多様な個性が受容されてきたこのまちで、生涯を通して学びたいこと、体得したいこと、夢中になれることを見つけていく中で、ともに感性を深めていく。また、人生とまちに対するこのような姿勢を互いに尊重し合い、これをまちの空気としていくことで、市外ひいては国外からも人が集い、夢中が溢れていくまちをつくっていく。特に、京都市の未来を担う子どもたちが、このまちの自然や歴史と文化に触れながら豊かで鋭敏な感性を育み、個性に応じてさまざまな物事を追求できるまちであり続ける。また、大学や博物館、文化財や史跡、伝統産業から先端産業までもが広く集積することを活かして、まち全体をキャンパスと捉えてこれらを有機的につなぎ合わせながら、年齢、性別、国籍、文化圏などを超えてともに学び合える、夢中と感動に溢れた人生とまちを織り成していく。

(3) ひとりひとりの個性や価値観を尊重し合える

わたしたち京都市民は、出自や生い立ち、年齢、性別、国籍、性自認や性的指向、宗教や信条、身体的・精神的特徴の有無や程度にかかわらず、すべてのひとが個性を発揮でき、互いを認め合いながら、自分の居場所と出番を見つけて日々を享受できるまちをつくっていく。この際、国内最初の人権宣言を採択した全国水平社の設立や、障害児教育と福祉事業の全国的な先駆けとなった京都ライトハウス創設をはじめ、京都市の先人たちが実践してきた人権尊重の精神性と先進的な取組とを継承していく。あらゆる個性を互いに受容し、互いを思いやり理解しようとする心を育み、安心・安全のもとで住みたい場所に住むことができる、また、だれもが等しく就労の機会を得られ、それぞれが望む生き方や暮らし方を実現できるまちにしていく。

第五章 わたしたち京都市民のこれから

わたしたち京都市民がめざすまちのすがたは、狭義の市民、行政、市会がそれぞれの役割を果たしながら、ともに真摯に議論を重ね、この議論を日々の活動に反映し、そしてまた活動の経過や帰結を議論に反映していくという、不断の循環の中で実現されていくものである。

市政の主体は、市長や市会議員を選出する、市内に居住する狭義の市民が担ってきた。

市長は、市民の想いをもとに市政の方針を示し、行政がこれを実行してきた。

市会は、市民の代表として、市民の声や活動を行政に伝えていくとともに、市長とともに市政の両輪の一つとしての役割を果たしてきた。

しかしながら、京都市は、市内に居住する狭義の京都市民によってのみつくられているわけではない。わたしたちの京都市においては、働き、学び、憩うために市外から日々足を運ぶ人々、進学・就職・育児等による転居後も京都市に深い愛着を抱いている人々、かつて観光で訪れた経験のある人々、訪れたことはなくとも京都市に対して憧憬や敬意を抱いてくれている人々など、さまざまな関わり方を見出すことができる。学藝の府たるわたしたちの京都市が、狭義の市民のみならず、これらの人々の想いや献身のもとで存立していることを、忘れてはならない。

わたしたち京都市民がめざすまちのすがたを実現していくためには、従来の狭義の市民の枠組みに囚われることなく、人生や日常のほんの僅かな一部であっても京都市の現在と未来をともにつくってくれるこれらの人々、いわば広義の京都市民と、積極的に協働していくこと、言い換えれば、多義的な市民性を促進していくことが不可欠である。また、この際、これらの広義の京都市民たり得る人々が銘々において自在に京都市にかかわることができる設計や、多層的で多彩な帰属意識の醸成・可視化を可能とする取組が求められる。

日本全体で人口減少と少子高齢化が続く見込みの中、今後の京都市においても、行政職員数や予算の制約、地縁の希薄化、家族・親族間の扶助の縮小など、公・共・私のそれぞれにおいてまちを支える機能が低下していくことが予見される。一方で、これまでの京都市においては、公・共・私のあわいを主体的かつ献身的に支える町内会、市政協力委員、NPO や有志団体、個別の名称を有さない集いやつながり、そして、これらの団体・活動間の連携や協働こそがまちを重層的に支えてきた。人的資源や行政機能が徐々に縮小していく未来においては、この縮小によって新たに生じる余白において、新たな団体や活動の組成を積極的に促すことはもちろん、これらと既存の取組を有機的に接続していくことが必要となる。

このような姿勢は、節度と矜持のもとで世代や公私の別をゆるやかに超えてきた京都市のまち柄と通底するものにほかならない。行政は、公務への責任感と誇りを強く保持しつつ、公・共・私の垣根を可能な限り低くすることに加えて、このまちで日々の生活を営む居住者たる狭義の京都市民と、それぞれの関わり方の濃淡を有する広義の京都市民とをつなげ、ともに京都市のまちづくりを担っていけるような設計に尽力していく。また、この過程において、あらゆる主体が「居場所」と「出番」を見出し、ひいては、これらを新たに作り出していけるよう協働していくことで、京都市の次の 1000 年の歴史の基盤を構築していく。

結び

世界文化自由都市宣言にもあるように、理想の宣言はやさしく、その実行はむずかしい。しかしながら、このまちは、数多の困難や苦難を乗り越えながら 1000 年以上にわたる時を経て、今日のわたしたちの京都市にまでこのまちの自然・歴史・文化・まち柄を継承してきた。

わたしたち京都市民もまた、現在そして未来において、数多の課題と向き合っていくこととなる。利便性や快適性を追求する技術革新が人間同士の生身のつながりを収奪していく中で、両者の均衡をどう見定め、どう実現していくのか。京都市を訪れる観光客が急増を続けていく中で、日々の生活をおくる市民への影響にどう対応していくのか。少子高齢化をはじめとする社会的要因で支援・ケアを必要とする人が増え続けていくにもかかわらず、これらの支援・ケアを担う人材が減少していく中で、誰ひとり取り残さないまちをどう築いていくのか。わたしたち京都市民の日々の営みは、このまちの歴史と文化を体現し継承していくという責任を果たしているか。政策や市民

活動が、直近の時勢や眼前の課題にのみ囚われたものでなく、このまちが醸成し保全してきた価値観に立脚できているか。わたしたちの京都市が、このまちの1000年の歴史に対して、ひいては、これから1000年先の未来においても、胸を張れるものであるか。

本長期ビジョン（仮称）は、このまちが1000年以上もの歴史の中で醸成してきた価値観を確認した上で、世界と日本、そして京都市の現状を踏まえて、これからのまちづくりの在り方を展望したものである。しかしながら、本長期ビジョン（仮称）は、あくまで、京都市そして京都市民の在り方を考えるにあたっての拠り所にほかならない。これを土台として、京都市民ひとりひとりが、上記した問いは もちろん、時代に即した新たな問いをも自ら見出し、それぞれの暮らしの中で考え続け実行していくことを、心から祈念したい。この過程においてこそ、京都市が日本中ひいては世界中の人々に敬愛され、人類社会の未来の一端をも担っていく、すなわち、世界文化自由都市として世界史において大きな役割を果たすという都市の理想が実現されていくはずである。

わたしたち京都市民は、このまちが保全してきた人間的遺産の享受者・継承者である。この意義と幸福を噛み締めながら、世界文化自由都市という都市の理想の実現を希求し、京都市そして京都市民の在り方を世界とともに不断に問い続けていくことをここに静かに決意して、本長期ビジョン（仮称）の結びとする。